9/10(土) まいど、倫理です。しっぱやす季節となりました、皆さんいかがお過しですか

「背負うべき覚悟を定めた時運命は滑らかに動きだす」
ありがとうございます。

今週の倫理

2022. 9. 10〜9. 16

9月のテーマ ｜ 境遇を受け入れる

1298号

幸せ運ぶ マホ一番

# 背負うべき覚悟を定めた時 運命は滑らかに動き出す

「私は子どものころ、母から塙（はなわ）先生をお手本にしなさいと励まされて育ちました」(1)

これは、昭和十二年、ヘレン・ケラーが初めて日本を訪れた際に語ったとされる言葉です。母親から示された「お手本」とは、日本人で江戸時代に活躍した塙保己一（はなわ ほきいち）という学者を指しています。日本中の歴史・文学等の資料を蒐集、編纂した文献集『群書類従』を刊行するという一大事業を成し遂げた人物として有名です。

収録文献数一二七七種類、総冊数六六五冊、完成までに約四十年を費やしたということ以上に、それが偉業である所以は、彼が盲目であったことにあります。

目が見えず、文字を読めない保己一は、対面で読んでもらった本の内容をすべて暗記して学んだのです。彼の書庫には六万冊の本があったとされ、そのすべてを暗記していたといいます。この驚異的な記憶力は、持って生まれた素質と共に、想像を絶する努力の結晶に他なりません。

倫理経営のテキストである『万人幸福の栞』第三条には、そのことを次のように述べ、塙保己一を取り上げています。

……塙保己一が、日々「般若心経」を読んで心をむちうち、大『群書類従』を編さんしたその努力、ヘレン・ケラー女史の師のサリバンが、いかにそのチャンスを捕えて教育して、この三重苦の大天才を生み出したか。これを思うと、盲目という一見不遇のさだめは、一転して大きい幸運と輝きわたった。（前掲書三十六頁）

ここで、着目すべきは、「さだめ」という一語です。「さだめ」とは、最早どうにもならないこと、変えようのないことです。しかし、人生には運命も境遇も努力次第で変えることができる面があります。前者を「先天的運命」、後者を「後天的運命」と言ったのは明治の文豪、幸田露伴でした。(2)

目が見えないということが、もはや不変の「さだめ」であるならば、耳で聞き決して忘れぬという道を進むこと、これが、後天的運命を切り開くということでしょう。

人には、生まれた時代や国、性別、親、素質といった、わが命に、もともと宿った「さだめ」があります。これは、己で背負うもので、何人も肩代わりすることはできません。しかし、この生命の基盤を起点に、如何なる人生を歩むかは、各人の意志により自由に決めることが可能です。

自らが背負う宿命を嘆き、悲しむだけでは重圧に押しつぶされてしまいます。反対に、「さだめ」に抗う生き方は、時に激しい力を生み出しますが、どこかで無理が生じ、ポキリと折れてしまいかねません。

変わらざる宿命を、静かに確と受け入れ、それと共に生きる人こそ「人生の勇者」と言い得るのではないでしょうか。背負うべきものを背負う覚悟が定まった時、後天的運命は滑らかに動き出すに違いありません。

(1) 公益社団法人 温故学会 HP
http://onkogakkai.com/aboutonkogakkai/helen_keller/
(2)『運命は切り開くもの』幸田露伴著

え・城谷俊也